男性への性別越境における
異なる自己のあり方に関する一考察

宮　田　りりぃ

1．問題の所在

トランス女性／男性とは、それぞれトランスジェンダー（性別越境者）の中でも、女性／男性として生活する人を指す言葉であり、とりわけ日本では、MtF（Male to Female）／FtM（Female to Male）という言葉でより広く知られてきた。

日本において、性別越境者が直面する困難が社会問題化されるようになったのは、1990年代半ば以降のことであった。当時、海外から輸入した医学概念である「性同一性障害」（Gender Identity Disorder）に基づき、患者への医療的介入の正当性が主張されるようになり、1998年にはガイドラインに沿った厚生省（当時）も認める形としては初となる性転換手術が実施された（山内 1999）。さらに、2000年代に入ると諸要件を満たした「性同一性障害」の患者に戸籍上の性別変更を認めるための法律案が議員立法を経て可決・成立へと至った（南野 2013）。また、この当時世間では、俳優の上戸彩が「性同一性障害」に苦しむ中学生の役を演じた「3年B組金八先生」第6シリーズ（2001-2002年 放映）や、この役のモデルとなった作家の虎井まさ衛が呼びかけ人を務めた（性転換手術を受けた当事者たちによる）戸籍上の性別訂正を求める一斉申し立て等が注目を集めた（虎井 2003）。

しかしながら、性別越境者であることを活かし働く人々や、パートタイムでトランス（性別越境）する人々は、「性同一性障害」の説明原理にうまく適合しない存在として周縁化されていった。ただし、とりわけMr.レディやニューハーフについて言えば、「森田一義アワー 笑っていいとも！」のコーナー「Mrレディー Mrタモキンの輪！」（1988-1989年 放映）や「難波金融伝 ミナミの帝王」の第11弾「嘆きのニューハーフ」（1998年 制作）といった人気のテレビ番組やビデオ作品において中心的に取り上げられる等、世間の注目を集めてきた。加えて、上記の社会問題化が展開される以前から、トランス女性の側では女装クラブやニューハーフヘルスといった当事者たちを包摂する商業施設がそれなりの規模で存在し続けてきた（三橋 2006、畑野 2018）。他方、こうした商業施設が乏しかったトランス男性の側では、男装クラブ等で働く当事者たちを取材した写真家によるルポタージュ（外山 1999）やオナベとして飲食店で働いた経験のあるタレントによるフォトエッセイ（諭吉 2010）等は出版されているものの、それほど世間の注目を集めることはなく、その実態についてもほとんど明らかにされてこなかった。

以上の問題関心から、本稿では「性同一性障害」に基づく社会問題化から周縁化されてきた人々の中でも、出生時に女に割り当てられた性別越境者であることを活かし働いた経験を持つトランス男性に注目し、その実態について明らかにしていく。

2．先行研究とリサーチ・クエスチョン

以下では、性別越境者たちを包摂する商業施設利用層の実態について描き出した先行研究を3つに大別して確認した上で、本稿のリサーチ・クエスチョンを設定する。

第1に、男性解放運動の潮流である。当該層に焦点化して論じた最も初期の書は、「男性学の誕生をはっきり宣言した」（伊藤 2009）と言われる、

心理学者の渡辺恒夫による『脱男性の時代』（渡辺 1989）であった。渡辺は、女装サロンでのフィールドワークに基づき、女装者を社会における規範的男性性の抑圧に苦しむ男性として位置づけた上で、そうした抑圧からの解放の可能性を女装の実践に見出している。だが、そこでは上記のような解放の可能性が示されるに留まり、女装の実践によって人々がどのように解放される（あるいは解放されない）のかまでは十分明らかにされなかった。

第 2 に、性社会史研究の潮流である。「実証的なクィア・スタディーズのさきがけ」（河口 2010）と評された書である『戦後日本女装・同性愛研究』（矢島編 2006）は、昭和から平成にかけて活躍した女装者・女装者愛好男性を調査対象とする詳細なライフヒストリーの記述を中心にした第 1 部と、女装・同性愛に関する論文集の第 2 部とで構成されている。この第 1 部には、前述したライフヒストリーの他に、それらに関する解説や考察も収められており、中でも石田による考察では、分析対象となった女装者のライフヒストリーの中に「変化する女装者心理」と「不変の非同性愛者性」とを見出し、さらに当時の歴史資料を参照しながら、分析対象者が「女装者心理」を「発達」するものとして語ると同時に、「ホモ」を卑下し、それとのたえざる差異化を通して自己を語らなければならなかったのは、フロイトに依拠した当時の「解釈スキーム」の中で自身の女装について理解していたためであると結論づけている。だが、ここではそのような「解釈スキーム」が、周囲の人々との相互作用を通してどう獲得されていったのかまでは明らかにされなかった。

第 3 に、社会学研究の潮流である。宮田（2018）は、「男性としての日常生活」と「パートタイムの女装生活」という二重生活を送る当事者が、トランスを伴う自身の経験をどう意味づけているのかに注目した。そこでは、成長の過程で男に振り分けられることや固定的な男性役割モデルの体現を求められることに対して違和感や抑圧的感覚を覚えるようになった調査対象者が、女装ルームにおける女装の実践や仲間たちとの出会いを通してこ

れらの感覚から解放されていった様子を描き出すことによって、「性同一性障害」に基づく社会問題化から周縁化される傾向にあった層の中にも性のあり方に関して深刻な問題に直面している人々が存在することや、上記のような解放には女装コミュニティのような（支配文化とは異なる）独自の生活文化を持つコミュニティが寄与していることが明らかにされた。だが、前述した２つの研究同様、ここで調査対象となっているのは女装者であり、トランス男性によるこうした意味づけがどうなっているかを明らかにするという課題は未だ残されたままとなっている。

以上を踏まえて、本稿では出生時に女に割り当てられた性別越境者であることを活かし働いた経験を持つ当事者が、トランスを伴う自身の経験をどう意味づけているのかについて明らかにする。

3．方法

3.1.　分析の枠組み

ここでは、前述の問いを明らかにするために、主としてマートンによる準拠集団論を参考にして理論的枠組みを検討する。マートンによると、準拠集団概念とは「人々が自分らを種々の集団に関連させ、また自分らの行動をこれらの集団の価値に準拠させる過程を中心としている」（Merton 訳書1961）。さらに、この概念にもとづく準拠集団論では、「個人が評価と自己評定の過程で、他の個人や集団のもつ価値や基準を比較のための準拠枠として取る場合、その決定因と結果を体系化すること」を狙いとしている。このように、準拠集団論では所属集団と準拠集団とを区別した上で、特定の準拠集団が持つ準拠枠を個人がどう主体的に選び取っているかに関心が向けられている。それにより、準拠集団論では、定位家族のような個人がすでに所属している集団の準拠枠にのみ着目してきたそれまでの理論的枠組みの限界を乗り越え、複数の個人・集団の中から個人がどう準拠枠を選び取るのか、その過程について捉えることが可能となった。

ところで、自らの行動に影響を与える準拠枠が変化することによって、（過去の準拠枠を体現する自己と新たな準拠枠を体現する自己といった）異なる自己のあり方の間で一貫性が保たれず、自己イメージの矛盾が生じることはないのだろうか。たとえば、自己に関する語りの一貫性について、佐々木（2017）は以下のように指摘している。

> 単純な物語は他者に消費される。また、単純な物語のほうが自己を安定化させる。それゆえ心理療法的には、一貫した物語を語ることには意味があるといえよう。

この指摘を踏まえれば、たとえ自己イメージの矛盾が生じたとしても、それを解消し一貫した物語として再編出来たならば、他者からの受容感や安定した自己イメージへとつながる可能性がある。そこで参考にしたいのが、バーガーとルックマン（Berger&Luckmann 訳書1977）による議論である。彼らは、主観的現実の「全面的とも思えるほどの変化」は「社会化過程のやりなおしを必要とする」と述べた上で、そのような変化を「うまくやりとげるための〈処方箋〉には、社会的条件と概念的条件との２つが兼ね備わっていなければならない」と指摘する。まず、前者の「社会的条件」とは、後者の条件達成に先立つ「重要な他者」[1)]の存在であり、準拠集団論で言うところの新たな準拠集団にあたるものである。次に、後者の「概念的条件」とは、「重要な他者」との相互作用を通して得られた現実を捉え直すための装置であり、準拠集団論で言うところの新たな（準拠集団が持つ）準拠枠にあたる。なお、桜井（2002）によるとこのような装置は、「ライフヒストリーに埋め込まれたさまざまなリアリティ間の断絶をうめ、自己の生活世界にある程度の一貫性をあたえる機能をはたしている」。このように新たな準拠枠を参照することによって、前述のような異なる自己のあり方が存在したとしても、両者を一つの物語の中に位置づけて語ることが可能となるのである。

以上の検討を基に、本稿では生活史調査によって得られた事例の分析を行う。すなわち、周囲の人々との相互作用を通して、トランスを伴う調査対象者の経験がどう意味づけられていくのかを、準拠集団論を手掛かりにして描き出す。さらに、その際社会的条件及び概念的条件がどう達成されているかにも注目する。

3.2. 調査対象者A（仮名）のプロフィール

本稿の調査対象者は、1980年代後半生まれ、年齢は20代後半（調査時）のトランス男性A（仮名）で、調査を実施したのは2018年6月、調査回数は1回（所要時間は85分）だった。以下は、簡潔にまとめたAの生活史である。

中国地方で生まれ育ったAは、子どもの頃からスポーツに励み、中学校では軟式テニス部、高校では女子サッカー部に所属していた。だが、当時は男っぽくふるまっていたためか同級生たちからいじめられ、その影響もあり不登校になったり保健室登校することもあった。また、中学生以降は、自分が女子に振り分けられることや制服等が男女で分けられていることに対して違和感や嫌悪感を覚えるようになり、高校3年生のある日心を開いていた養護教諭にその悩みを打ち明けたところ、「性同一性障害」について教えて貰い、その言葉を知って「自分はこれかもしれない」と思ったと言う。

高校卒業後は、単身地元を離れ関西地方にある看護系の短大へ進学する一方、ジェンダークリニックへの通院も始め、ホルモン療法や乳房切除術を受けた。そして、短大卒業後は看護師として病院で働くようになったが、職場でのアウティングや差別的な言葉によって精神的に追い詰められ、また当時付き合っていた女性の親に反対され婚約を破棄せざるを得なかったことも重なり、うつ病を患って退職することになった。その後、飲食店で出会ったある女性に貢いで多額の借金を抱えたり、関東地方に移り住みオナベのショーパブに入店したものの低賃金・長時間の過酷な労働だったためその店から逃げ出したり、借金返済のため性風俗店で女性として働いたり

といった紆余曲折を経て、20代前半でタイに渡り性別適合手術を受け、戸籍上の性別変更も済ませてもう一度看護師として病院で働くようになった。

現在は、性別越境者の健康問題等に関心を持つようになり、セックスワークをする当事者の実態把握のため、病院勤務の傍ら副業として当事者たちが働く性風俗店等でも働いていると言う。

3.3. 調査の方法

インタビューの内容は、調査対象者から事前に承諾を得た上でボイスレコーダーに記録し、後日筆者自身が文字起こしを行い分析に用いた。文字起こしした文章の中には、そのままだと読み難い部分や前後の文脈を踏まえないと理解できない部分が存在したため、これらを引用する際はインタビュー内容を損ねないよう注意を払いながら最低限の修正を加えたり、括弧内に説明を加えた。なお、プライバシー保護の観点から、本稿に登場する人物名は全て仮名で表記するとともに、個人・団体等の特定につながらないよう注意を払いながら引用した。また、インタビューの手法としては半構造化面接を採用し、主として以下の内容について質問を行った。

- 出生年と生まれ育った環境
- 学歴と学校での生活
- 自身が望む（または周囲から期待された）性のあり方
- 性的指向や性行動
- 家庭や職場における生活
- 家族や恋人、友人といった身近な他者との関係

4．解放の物語

4.1.　抑圧的な過去の準拠枠

小学生までのAは、周りの子たちが男女を問わず仲良かったせいか、性別について特に違和感を覚えることはなかったと言う。だが、中学生になり周囲が男女を意識するようになると、自身も男女の違いを意識し始め、自分が女子に振り分けられたり、制服等が男女で分けられていることに対して違和感や嫌悪感を覚えるようになった。以下は、中学生の頃についての、Aと筆者との会話である。

A：僕、中学生の頃にスポーツをしてたんで、それでまだその、（性別に関する悩みは）スポーツに逃げれてた部分があって。

筆者：何されてたの？

A：テニスですね。

筆者：硬式？軟式？

A：軟式です。で、「部活」って言えば、（制服の代わりに）部活着を着てても、特にまぁ（先生から）そこまで怒られることはないので。

筆者：まぁ部活着は、そんな、スカートでテニスしないですもんね。

A：うん。前はね、（部活始めて）1年目はスコートだったんですよ。で、「それおかしいんじゃないか」って言って、みんなでなんか、反発を途中ぐらいからしたんですね、2年目かなんかで。僕なんか副キャプテンもしてたんで、ある程度権力はあったんですね。で、なんかそれで（先生に要望を）言って。他（の女子生徒）もなんか、ボーイッシュな子が2～3人いたんスよ、僕以外に。で、（部活着が）ズボンに変わったんスよね。

こうして、Aは同じ部活の仲間たちと学校側に働きかけることで、スコートという可愛らしい女性性を伴う部活着の着用を回避するだけでなく、

女子制服の着用まで回避することが出来たのである。また、その後Aは高校への進学を控える中で、今度はサッカー部に入りたいと思うようになった。だが、男女混合のサッカー部がある高校はなく、マネージャーとしてではなく選手として活躍出来る見込みのあった女子サッカー部のある高校に進学することを決めた。

このように、中高生の頃のAは、周囲から期待された固定的な「女性役割モデル」の体現を強いられることに対して部活動を通して抵抗していた。だが、この頃のAが直面していた問題は、抵抗することによって軽減出来るものばかりではなかった。以下は、当時受けていたいじめに関するAの語りである。

A：生徒会とか委員会とか、昔って言うか、僕の時にはすごい、田舎なのもあったかもしれないですけど、「男性を立てる」みたいな感じで、「男性がリーダーシップを取る」とか「女性はその後ろをついて行け」みたいな感じのところがあって。同じクラスの(男)子とやりたいものが被っても、その子を優先しないといけないみたいな感じで、逆に自分がトップに立つと、「女のくせして」みたいな感じでついてきてくれなかったりとか、後はその、(自分が) ちょっとでも男っぽくふるまってしまうと、「なんかあいつ、女なのに男みたいで気持ち悪い」みたいな感じで、集団で結構いじめられたりとか (した)。

当時、女子に振り分けられていたAは、同級生から上記のようなセクシズム（性差別）に基づく固定的な「女性役割モデル」の体現を強いられ、それに背くような態度を取ったことで、無視や机の中に異物を入れられる等のいじめ被害を受けた。そして、こうした被害の影響もあり、Aは不登校になったり保健室登校するようになったと言う。

4.2. 新たな準拠枠の獲得

高校３年生のある日、Aは心を開いていた養護教諭のもとを訪れ、「もう限界だ」と言って泣き崩れたと言う。なお、Aが自身の性のあり方に関する悩みを他人に明かしたのは、これが初めてのことだった。以下は、当時についてのAの語りである。

A：「自分の身体が嫌だ」みたいな感じで、「自分がなんか男だと思う」みたいな感じで言った時に、「じゃあ性同一性障害なのか？」みたいな感じで先生が調べてくれて。で、その言葉を知って、「自分はこれかもしれない」って思った。……[中略]……思春期の頃の自分って、すごい自己肯定感が低くて、「自分なんかいなくなればいいんじゃないか」とか。なんか「早く人生終わりにしたい」みたいな感じで、ずっと思ってたんですね。で、そういった時に、大人も手を差し伸べてくれなかったりとか、「同級生とかに自分の気持ちなんか分かんないし」みたいな感じに思ってたんですよ。で、ずっと（そうやって）きてた時に、（保健室登校する中で）たまたまその養護教諭の先生とかが、僕（から）は結構何も話したりとかはしなかったんスけど、些細な会話みたいなのをずっとしてくれてて、そういうので「この人なら（悩みを話して）いいかも」って思ったのと、もう我慢が限界に来てしまったみたいな（状況だった）。

こうして、養護教諭の先生を通して「性同一性障害」について知ったことが契機となり、Aは高校を卒業して短期大学に入学すると、ジェンダークリニックで性同一性障害診療を受け、さらに男性へのトランスも始めた。また、当時Aには高校生の頃から付き合い出した彼女がいて、以下のようにAの性のあり方を受け入れ、トランスの後押しもしてくれたと言う。

A：男子トイレに入るのも、なんか、「結構入りたいけど抵抗がある」

みたいな感じで、なかなか入れずにいることもあったんですけど、その子が、なんか「そんな緊張とかせずに、そっちに行きたいんだったら、入ればいいんじゃない。周りの目なんかいちいち気にしなくていい」みたいに言ってくれたりして……。パンツとか、やっぱ男性モノにトランスしていく時に、一緒に買いについてきてくれたりとか、そういうのがでかい（後押しになった）スかね。

このように、Aは養護教諭の先生や元彼女との出会い（社会的条件の達成）だけでなく、トランスして生活するという新たな準拠枠も獲得（概念的条件の達成）するに至った。その結果、Aは女子に振り分けられることや固定的な「女性役割モデル」の体現を強いられることに対する、それまでの違和感や嫌悪感から解放されることが出来たのである。

4.3. 新たな準拠枠の参照

インタビューの中でAは、男性にトランスしなかった頃について、新たに獲得した準拠枠を参照しながら筆者に語っていた。以下は、当時の状況についての、Aと筆者との会話である。

A：僕やっぱ田舎で、一人っ子だし、周りにそういう（トランス男性の）人もいなかったし、テレビとかも、（トランス男性の人を取り上げたり）してなかったんですよ。まぁ、偶然観たことないっていうのもあったんスけど。

……[中略]……

筆者：それ（性同一性障害診療を受ける）まで、周りにトランス（男性）の人っていなかったんです？

A：いなかったんスよ。……って言うか、実は他の中学校にいたんですよね。でも、知らなかったんスよ。で、20歳超えたぐらいに、やっと知ったんですよね。実は同い年で、他の中学校に自分と同じ

ような人がいたみたいな。

一見すると、望まない性別役割モデルの体現を強いられることに対して抵抗することはあっても、あくまで女子生徒として生活していた過去のAと、トランスして男性としての生活を送るようになった新たなAとの間には、一貫性がなく矛盾が生じているように見える。だが、前述のようにAは、まだトランスに関する知識や情報、ロールモデルを獲得出来ておらず、またそれが難しかった地方在住という状況も引き合いに出し、過去の自分にはそもそもトランスという選択肢がなかったことを筆者に提示していた。

こうして、新たな準拠枠を参照しながら過去の自己について語ることによって、Aは一見矛盾するような過去の自己と新たな自己とを、一貫した物語の中に位置づけて語ることを可能としていたのである。

5．葛藤の物語

5.1.　性行動における葛藤

前節までは、一方的な時間の流れに沿って断絶しているように見える自己のあり方が、どう一貫した物語として語られるのかという点に注目してきた。それに対し本節では、同時期に置かれた状況において断絶しているように見える自己のあり方が、どう一貫した物語として語られるのかという点に注目する。

ところで、人の性別とは、外性器の形状や戸籍上の記載に限らず、服装や体つき、髪型や顔、声や物腰といった実に多様な観点から判断され得るものである。それゆえ、一概にトランスと言っても、それは「女から男になる」といった単純なものではない。以下は、こうした実践に関する、Aによる語りである。

A：トランスをしても、やっぱその、マスターベーションをしたりす

る人もいたりして。自分自身も（それを）するんスけど、何かあんなに違和感があったのにしてしまうっていうのが、自分自身の中での疑問だったりとか……。セックスとかも、ふつうに「男性として」っていうのが、やっぱ難しい部分ってあるじゃないですか。男性器があるわけでもなかったりとかして。どうしても受け身になったりすることもあると思うんですけど、なんかそれが別に、嫌ではないんですよ。

このように、Aは性行動において、自分の女性器に触れることや女性的な印象を伴う立場を取ることが嫌ではないと言う。だが、すでに確認したとおり、かつてAは自身の身体的特徴や固定的な「女性役割モデル」の体現を強いられることに対して違和感や嫌悪感を覚えていた。それゆえ、上記のような性行動が嫌いなはずの自己と、それらを嫌とも思わず実践している自己という異なる自己のあり方の間で葛藤に直面し、両者を一貫した物語の中に位置づけて語ることが難しい状況に置かれていたのである。

5.2. 更新された準拠枠の参照

しかしながら、インタビューの中では、Aが前述の葛藤を乗り越える可能性について言及している場面もあった。以下は、トランスを伴う自身の性のあり方に対する意識変容についての、Aによる語りである。

A：今まで、すごい身体に違和感があって、胸オペ（乳房切除術のこと）もしたし、内摘（子宮摘出術のこと）とかもしてきたけど、何かその、「嫌な自分の身体に触ってマスターベーションする」とか「セックスをする」っていうところが、「（どうして）あんだけ嫌だったのに出来るんだ？」って思ったんスけど、何か自分で考えてて、ある一定のトランス……、自分の満足のいくところまでトランスをしてしまうと、その、「嫌だったことが嫌じゃなくなってくるの

かな？」っていうの、すごい思ったんですよね。……[中略]……「多分これ（性行動について）、ジェンダークリニックとかで話す人いないのかな？」って思うんスけど……。っていうのも多分、話したところで、「『お前は（性同一性障害とは）違う』って除外されて、治療に進めないんじゃないかな？」って思ってしまうんですよね。

前節で確認したとおり、当初Aが獲得した新たな準拠枠は、漠然と男性にトランスして生活するというものであった。だが、その準拠枠はトランスを伴い、具体的には乳房切除術や子宮摘出術を受けること等によって、自身の性のあり方に対する意識変容の可能性を備えたものへと更新されていた。その結果、Aは性行動における葛藤の要因を、こうした可能性を想定出来ていなかったことに見出していたのである。ただし、Aはこれを、単に個人の問題に還元して捉えてはいない。前述のように、門番として立ちはだかる医師に身体療法への道を開けてもらうため、典型的な「性同一性障害」の患者を演じる一方、それによって自身の性のあり方や性行動について相談しづらい状況が存在していたことを指摘している。

こうして、性行動に関する葛藤に直面しつつも、更新された準拠枠を参照し、さらにその背景にある状況も引き合いに出しながら、Aはその葛藤を乗り越える可能性に開かれた存在であること、すなわち同時期に置かれた異なる自己のあり方を一貫した物語の中に位置づけて語ることが出来る可能性について示唆していたのである。

6．まとめと考察

本稿では、出生時に女に割り当てられた性別越境者であることを活かし働いた経験を持つ当事者による自己物語を事例に、トランスを伴う自身の経験が周囲の人々との相互作用を通してどう意味づけられているのかにつ

いて、主にマートンによる準拠集団論を手掛かりにして描き出してきた。以下ではまず、本稿の調査によって得られた知見を２つの観点からまとめる。

第１に、一方的な時間の流れに沿って断絶しているように見える異なる自己のあり方についてである。Aは、養護教諭の先生や元彼女との出会いだけでなく、トランスして生活するという新たな準拠枠も獲得することによって、社会的条件及び概念的条件を達成するに至った。その結果、新たな準拠枠を参照しながら過去を振り返り、あくまで女子生徒として生活していた過去の自己と、トランスして男性としての生活を送り始めた新たな自己という異なる自己のあり方を、一貫した物語の中に位置づけて語ることを可能としていた。

第２に、同時期に置かれた状況において断絶しているように見える異なる自己のあり方についてである。Aは、性行動において自分の女性器に触ることや女性的な印象を伴う立場を取ることが嫌いなはずの自己と、それらを嫌とも思わず実践している自己とを、一貫した物語の中に位置づけて語ることが難しい状況にあった。だが、Aはトランスを伴い更新された新たな準拠枠を参照することで、上記のように異なる自己のあり方を、一貫した物語の中に位置づけて語ることが出来る可能性について示唆していた。

それでは、これらの知見を踏まえて、以下で本稿の意義及びトランス男性が直面する問題解決に向けた課題について考察する。

まずは、本稿の意義についてである。すでに述べたとおり、これまで日本では性別越境者が直面する問題が「性同一性障害」に基づいて社会問題化されてきた一方、性別越境者であることを活かし働く人々やパートタイムでトランスする人々は、その説明原理にうまく適合しない存在として周縁化されてきた。加えて、性別越境者の中でも出生時に女に振り分けられた人々は、Mr. レディやニューハーフに比べて世間の注目を集めることもなく、よりいっそう周縁化されてきた。そのため、性別越境者を包摂する商業施設で働いた経験を持つトランス男性に注目した本稿は、この二重の

周縁化によって潜在化する傾向にあった人々の実態について明らかにしたという点で意義があると言えよう。

次に、性別越境者が直面する問題解決に向けた課題についてである。本稿で取り上げた事例を振り返ると、Aは中学生の頃から望まない性別カテゴリーに振り分けられることや、望まない性別役割モデルの体現を強いられることに対して違和感や嫌悪感を覚え、またトランスするようになってからも自身の性行動に関する葛藤に直面していた。これらの背景としては、教育社会学研究においてすでに指摘されている「学校の性別分化」（土肥 2015）に加え、性別越境者の性行動に関する知識や情報へのアクセスが難しいという状況が挙げられるだろう。とりわけ後者では、これまでにも当事者による自伝的著書等において取り上げられることはあったものの（たとえば、蔦森 1993、綾小路 1995）、トランス男性による性行動や、性別越境者を対象とするHIV/AIDS・性感染症予防、性別越境者の性暴力被害等についてはほとんど議論されない状況が続いてきた。そのため、今後はこれらの実態がどうなっているかについて明らかにすると共に、そこで得られた知見を当事者たちにどう還元していくかが課題であると言えよう。

注

1） G.H.ミードが提唱した概念に、個人の所属する社会集団の代表的態度として他者の態度が組織化された「一般化された他者」（Mead 訳書 1995、pp.191-192.）がある。この概念に依拠して、それを社会集団の代表的態度としてではなく、「これまであるいは現在重要である人々を意味」するものとして捉え直した概念が、ガースとミルズによる「重要な他者」（Gerth & Mills 訳書 1970 p.110）である。

参考文献

Berger, P. & Luckmann, T., 1966, *The social construction of reality: A treatise in the sociology of knowledge*,Garden City, NY: Doubleday.（＝1977，山口節郎訳,『日常世界の構成―アイデンティティと社会の弁証』，新曜社）

南野知恵子，2013,「第3章 1-1 性同一性障害者性別取扱特例法に関する取組みと経緯」『性同一性障害の医療と法―医療・看護・法律・教育・行政関係者が知っておき

たい課題と対応』，メディカ出版，pp.204-212.
佐々木掌子，2017,『トランスジェンダーの心理学―多様な性同一性の発達メカニズムと形成―』，晃洋書房
Merton, Robert K., 1957, *Social Theory and Social Structure:Toward the Codification of Theory and Research*, FreePress.（＝1961，森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳,『社会理論と社会構造』，みすず書房）
虎井まさ衛，2003,『男の戸籍をください』，毎日新聞社
Mead, G. H., 1934, edited and with an introduction by Charles W. Morris, *Mind, Self, and Society, from the standpoint of a social behaviorist*, Chicago: The University of Chicago Press.（＝1995, 河村望訳,『デューイ＝ミード著作集6 精神・自我・社会』，人間の科学社）
Gerth, H. H. & Mills. C. W., 1953, *Character and Social Structure:* The Psychology of Social Institutions, Harcourt: Brace & World Inc.（＝1970，古城利明・杉森創吉訳,『性格と社会構造―社会制度の心理学』，青木書店）
三橋順子，2006,「第2部 第1章 現代日本のトランスジェンダー世界―東京新宿の女装コミュニティを中心に―」『戦後日本女装・同性愛研究』，中央大学出版部，pp.355-396.
畑野とまと，2018,「コラム トランスジェンダーとセックスワーク」『セックスワーク・スタディーズ―当事者視点で考える性と労働―』，日本評論社，pp.110-115.
宮田りりぃ，2018,「『二重生活』はいかに意味づけられるのか―ある女装者のナラティブを事例に」『解放社会学研究』，日本解放社会学会，pp.82-97.
外山ひとみ，1999,『MISS・ダンディ―男として生きる女性たち』，新潮社
諭吉，2010,『ぼく、長女です。』，ヨシモトブックス
渡辺恒夫，1986,『脱男性の時代―アンドロジナスをめざす文明学―』，勁草書房
河口和也，2010,「テーマ別研究動向（クィア・スタディーズ）」『社会学評論』61（2），pp.196-205.
伊藤公雄，2009,『新編 日本のフェミニズム12 男性学』，岩波書店，pp.1-28.
蔦森樹，1993,「男でもなく女でもなく―新時代のアンドロジナスたちへ―」，勁草書房
綾小路恋子，1995,「ニューハーフ恋子の告白」，データハウス
矢島正見編，2006,『戦後日本女装・同性愛研究』，中央大学出版部，pp.1-17.
土肥いつき，2015,「トランスジェンダー生徒の学校経験―学校の中の性別分化とジェンダー葛藤―」『教育社会学研究』（第97集），pp.47-66.